

金沢市大野町と輪島市の住民参加型まちづくりの住民意識の比較分析

A Comparative Analysis of Residents' Attitudes toward Town Planning by Resident Participation: The Cases of Ohno, Kanazawa and Wajima

中山晶一朗¹，高山純一²，野々田知代，米田亮³

Shoichiro Nakayama, Jun-ichi Takayama, Tomoyo Nonoda, Ryo Yomeda

1. はじめに

近年，住民参加によるまちづくりが各地で行われるようになってきている．住民参加でマスタープランが策定されたり¹⁾²⁾³⁾，住民参加での地区計画策定⁴⁾や道路・水辺空間計画策定⁵⁾など住民参加型まちづくりには様々な形態がある．しかし，まちづくりの背景や目的，その「まち」自体の規模，歴史や環境などが異なるため，まちづくりに対する住民の意識，どのように住民がまちづくりに参加することが良いのかということも異なり，そのまちにふさわしい住民参加型のまちづくりの形態を一つの型に押し込めることは不可能であろう．

本研究では，性格の異なるまちづくりの間で住民参加型まちづくりに対する住民意識がどのように異なっているのかを検討するため，石川県での性格の異なる特徴的な2つの住民参加型まちづくりの事例を取り上げ，アンケート調査により，住民参加型まちづくりに対し住民がどのように捉えているのかの比較分析を行う．本研究で取り上げる事例は，住民主体のまちづくり活動として取り組まれてきた金沢市大野町の「金沢みなと・大野まちづくり21協議会」，行政先導のまちづくりとして行われてきた輪島市のまちづくり活動である．この2事例はまちづくりの規模や内容および住民と行政のいずれが主体的にまちづくりを進めているのかという点が大きく異なっている．このようなまちづくりの相違によりどのような点で住民の意識に違いがあるのか，等を明らかにすることで，それぞれの住民参加型まちづくりのあり方，目指す方向性を示すことが可能となると考えられる．

2. 金沢市大野町と輪島市のまちづくりの背景

金沢市大野町は，現在人口1871人541世帯が住んでおり，昭和30年代までは大野港での漁業や貿易業と連携した醤油醸造業など地場産業を中心に栄え，活気ある町であった．しかし，金沢港の開港に伴って大野町地域および主要幹線道路が分断されるとともに，若者が減り始め，町が徐々に衰退し始めた．そこで，大野町では，昭和63年ごろからまちづくりへの取り組みがなされ，平成4年から地場産業を活かしたまちづくりを進める活動が始まった．平成6年に住民（町民）主体のまちづくり組織「金沢みなと・大野まちづくり21」（まちづくり21）が発足し，「まちづくりニュース」の発行，歴史的な町並みの保全，「醤油の里づくり」プロジェクトなど各部会ごとに住民主体の各種活動が続けられている．

輪島市は人口2.7万人あまりの能登半島に位置する地方都市である．これまで輪島塗や朝市，豊かな自然で観光客を集めてきたが，バブル崩壊により，観光客が減少し，漆塗りの生産額の落ち込みが激しくなり，また，「朝市」は昭和40年前後の観光ブームによって観光化が進み，市民の「市」としての性格が薄れ，再生が叫ばれるようになった．人口はここ10年間で1割の減少となり，高校生が卒業と同時に輪島を離れるため，高齢化率は25.9%となっている．

輪島市都市計画マスタープランの策定作業は多くの市民が集い合う活動を繰り返しながら進めていく「よらんかいね輪島」方式で進められた．平成11年に，輪島の商店街リーダーが中心となって策定委員会及び策定ワーキングを組織し，輪島市中心市街地活性化基本計画を策定した．都市ルネッサンス事業は道路整備と併せて市街地の空洞化に歯止めをかけ本来のにぎわい再生と市街地の活性化を図ることを目的としているが，

キーワード：住民参加，まちづくり，住民意識，比較分析

1 正員，博（工），金沢大学工学部土木建設工学科

Tel: 076-234-4614, Fax: 076-234-4632

2 正員，工博，金沢大学工学部土木建設工学科

3 経修，計画情報研究所

事業の性格上、市民が中心となった計画策定とそれによる合意形成が進められている。

3. アンケートの概要

アンケート調査は、対象地域の各世帯にアンケートを配布し、後日郵送してもらったものとした。アンケート調査内容は、その町で行われているまちづくり活動についての認知度や、まちづくり活動への参加状況、まちに対する思い、個人属性などである。

表1 アンケートの配布回収状況

対象地域	配布数(枚)	回収数(枚)	回収率(%)
大野	498	95	19.1
輪島	2500	463	18.5

4. 分析結果

4.1. まちづくり活動への認知度および参加状況

住民がまちづくり活動をどれほど知っているのか(まちづくり活動の認知度)は、大野町では、88%の住民(回答者)が協議会「まちづくり21」の存在を知っており、その具体的な活動については知らないと答えたのは9%に過ぎず、78%の人がその程度は異なるが具体的な活動を知っていると答えている。また、まちづくり21が発行している「まちづくりニュース」についても84%の人が知っているという結果であった。このように大野町の住民のまちづくり活動への認知は大きいことが分かる。

一方、輪島の場合は、まちづくり活動の内容についてその認知度を聞いたところ、「都市計画マスタープラン」については61%の人が「知らない」と回答してお

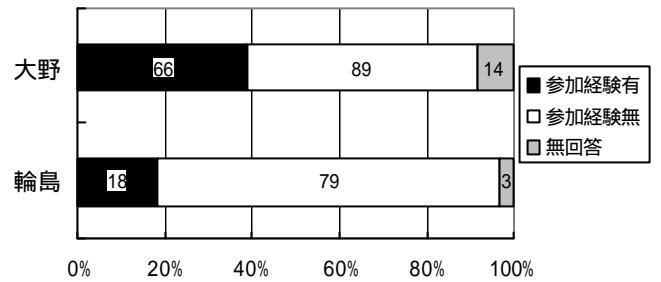


図1 まちづくり活動への参加経験の有無

り、「中心市街地基本計画」では63%、「都市ルネッサンス事業」では39%の人が知らないと回答し、それほどまちづくり活動が広く認知されているとは言えないことが分かる。

次に、まちづくり活動への参加した経験があるのかであるが、大野では、37%の人がまちづくり活動に参加したことがあり(図1参照)、そのうち62%の人が現在も活動に参加している。また、輪島は参加したことがある人は全体の約18%であり(図1参照)、決して多くはない。しかし、参加したことがある人の51%は現在も参加している。

このようにまちづくり活動への認知や活動状況が大きく異なっている原因としては、実際に行われているまちづくり活動の性格の違いが考えられる。大野町での活動は身近で直接かかわることが多い一方、輪島での活動はマスタープランなど直接目に見えないものが多い。また、大野町は住民参加型まちづくりが先進的な事例であり、多くの人がそのことを知っており、まちづくり活動に参加しやすい環境であることも考えられる。大野町と輪島市では、町・市の大きさが大きく異なっている。大野町は金沢市の一部であり、その面積は小さいが、輪島は一つの市であり、まちづくり活動の多くは中心市街地にかかわるものであり、それ以外の住民にはあまり関係が無いことが多いと考えられる。

4.2. 参加動機・不参加理由

まちづくり活動に参加したことがある回答者の参加動機を図2にまとめた。図2に記載されている数値はそれぞれの動機の全体に占

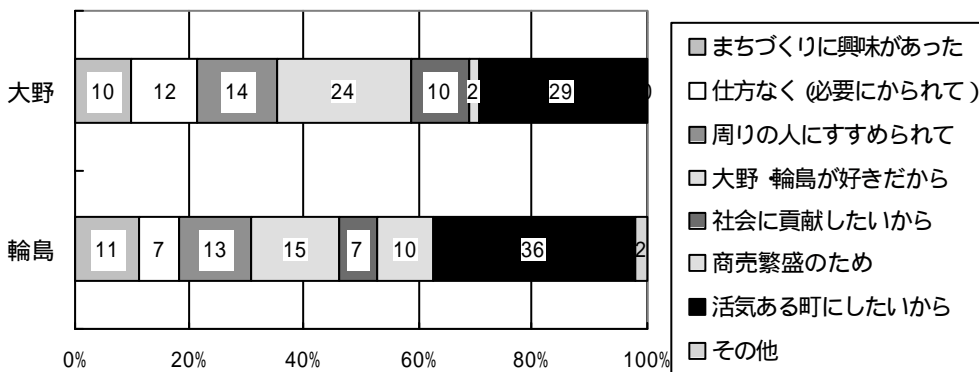


図2 まちづくり活動への参加動機

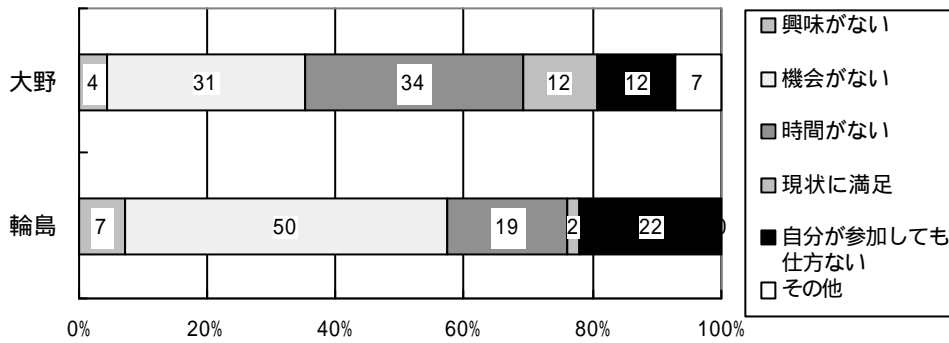


図3 不参加の理由

輪島の方が割合が高い。これは輪島でのまちづくりが中心市街地に偏っていること、規模の大きなまちづくりでは一人の果たす役割が小さくなること背景にあると考えられる。しかし、まちづくりが一部の人にだけ開かれたものである可能性もあり、参加の機

める割合(%)である。大野のサンプルが少ないため、²検定を行った結果、大野・輪島での参加動機の分布に違いがあるとは統計的にはいえなかった。但し、輪島の方が商売繁盛と活気のある町にしたいという2つの動機の人割合が大野に比べて高く、その2つ動機の占める割合は有意水準0.1ではあるが輪島の方が高かった。大野町でも「醤油の里」づくりなど醤油醸造業を中心とする地域振興のためのまちづくりを進めているものの、輪島でのまちづくりの方が中心市街地活性化などを期待する人の参加が多いことが考えられる。

参加したことがない人(参加非経験者)がなぜ参加したことがないのかの理由についてまとめたのが図3である。

²検定の結果、非参加経験者の不参加理由は大野・輪島で異なることが有意水準0.01以下で言えた。図3から参加の機会がないためと回答した人が輪島では50%である一方、大野では31%である。また、自分が参加しても仕方ないためと考える人も

会を増やす必要があると考えられる。それらとは逆に時間がないため参加しない人の割合は大野の方が高い。参加機会は比較的平等に与えられており、時間があれば参加したいと考える人の割合が高いと考えられる。

4.3. 住民の行政への要望

住民が行政に住民参加型まちづくりについて求めることをまとめたのが図4および図5である。ただし、回答は複数回答である。計画案作成段階、計画案完成後、事業完成後の3つの段階で、大野と輪島の住民の行政に要望することの違いを²検定した結果、計画案作成段階と計画案完成後では有意水準0.01で、事業完成後は有意水準0.05で大野・輪島住民の要望は異なる

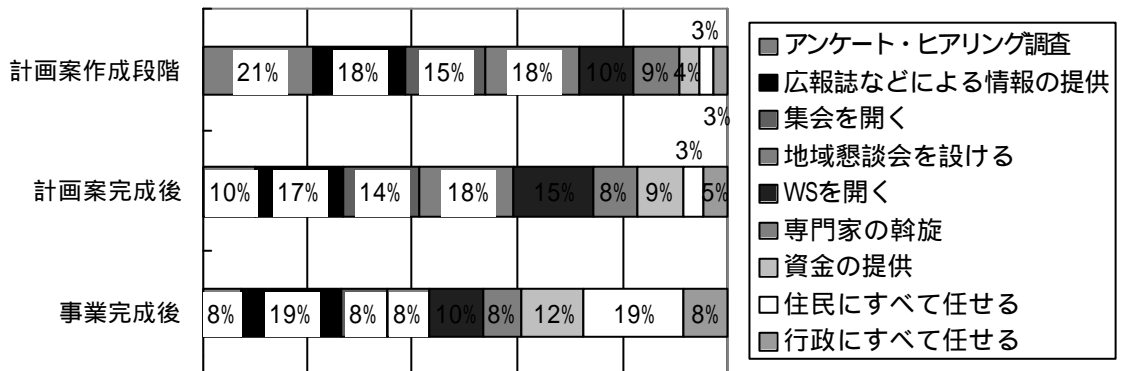


図4 大野住民の行政に対する要望

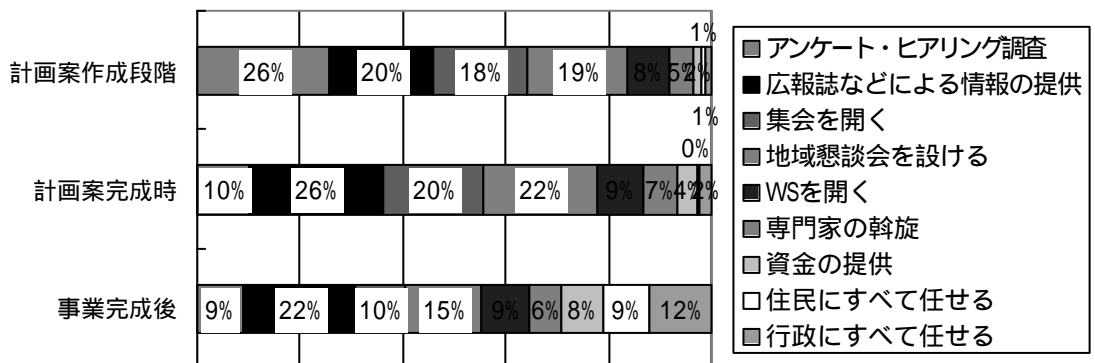


図5 輪島住民の行政に対する要望

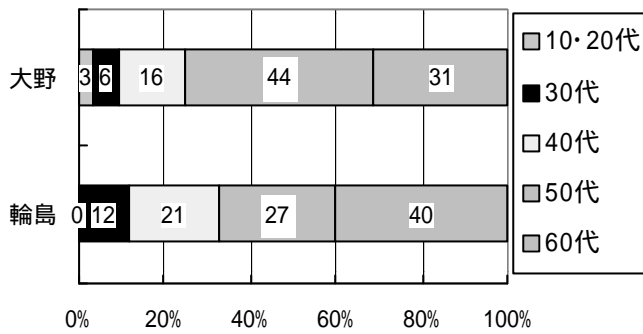


図6 大野と輪島の参加経験者の年齢

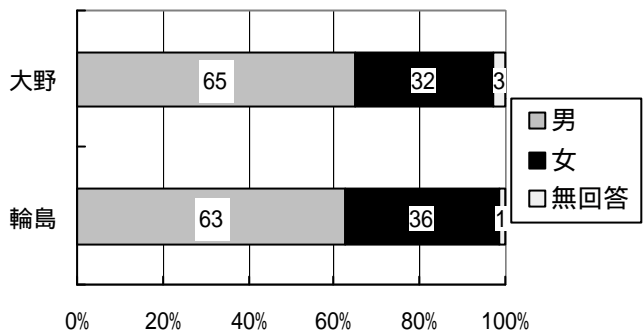


図7 大野と輪島の参加経験者の性別

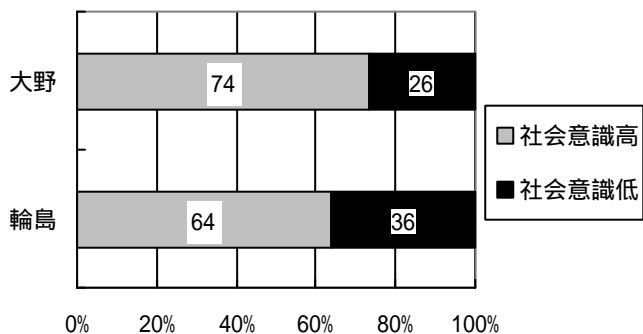


図8 大野と輪島の参加経験者の社会意識

ことが分かった。既に述べたようにまちづくりの性格が大きく異なるため、自ずと住民の行政への要望も異なったものとなっていることが分かる。特徴的と思われるのは、事業完成後の住民に全て任せるとの回答は大野では19%である一方、輪島では9%である。大野の住民は事業の完成後は住民に全てを任せてほしいと考えている傾向があると推測できる。

4.4. 参加者の属性

どのような人がまちづくりに参加しているのかを調べるために、年齢、性別、職業、居住年数、町への愛着度、社会への貢献意識（社会意識）別の参加経験者と参加非経験者の割合をまとめ、²検定を行った結果、社会意識のみ参加・非参加で違いがあり(有意水準 0.05)、

年齢・性別・居住年数、まちへの愛着度には違いは見られなかった。

図6から図8は参加経験者の年齢、性別、社会意識を大野と輪島で比較したものである（居住年数・愛着度は紙面の都合上省略）。ただし、大野では70歳以上のサンプルがなかったためそれらを除外している。これら図からは多少の違いが見られるものの、²検定の結果、ともに有意水準0.1でも違いは検出されず、これら全ての属性による参加経験者と非経験者の違いはないと考えられる。なお、職業については大野と輪島のデータではその比率は大きく異なるため単純な比較はできなかった。このようにたとえ性格が全く異なるまちづくりであり、まちづくりへの要望・期待が異なるとしても、まちづくりへの参加者は同質であることが分かった。

5. おわりに

本研究では、石川県の形態が全く異なる住民参加型まちづくりの2事例（金沢市大野町と輪島市）を取り上げ、住民参加型まちづくりに対する住民意識および参加状況等について比較分析を行った。その結果、まちづくりの形態・性格がことなるため、住民が行政に要望すること等は両者で異なっていることが分かった。しかし、まちづくりへの参加者（参加経験者）には大野と輪島では違いは見られず、また、参加動機もあまり違いは見られず、まちづくりに参加する人はそのまちづくりの形態・性格にあまり依存しないことが分かった。

本調査研究は、(社)北陸経済調査会「平成13年度受託調査研究事業」の一部として行われたものである。ここに記して、感謝したい。

参考文献

- 1) 大和田清隆 (1998) 東京都調布市におけるワークショップ方式による都市計画マスタープランの策定過程とその成果の評価、日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 33, pp. 469-474.
- 2) 小林隆・日端康雄 (1998) 都市マスタープラン策定過程におけるインターネットの活用可能性に関する考察 - 大和市の計画策定事例を中心に -, 都市計画, No. 215, pp. 77-85.
- 3) 内田晃・佐谷宣昭・中野浩志・鶴心治・出口敦・萩島哲 (1998) 地方都市の都市計画マスタープランにおける策定プロセスと住民参加に関する研究 - 九州地域74自治体におけるケーススタディによる検証 -, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 33, pp. 457-462.
- 4) 天野裕・土肥真人 (1998) 東京都区部における地区計画策定プロセスの住民参加に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 33, pp. 445-450.
- 5) 村田義郎・延藤安弘 (2000) 参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察 - ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定(柳井市)を事例として -, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 35, pp. 865-870.